

令和５年度第２回 立川市文化振興推進委員会 会議録

開催日時	令和６年２月２６日（月曜日） 午前１０時～１２時
開催場所	たましんＲＩＳＵＲＵホール（立川市市民会館） ５階 第６会議室
次第	１．開会 ２．立川市第４次文化振興計画 令和５年度の取組状況の経過報告 ３．立川市第５次文化振興計画策定に向けて ４．その他
配布資料	資料１ 立川市文化振興推進委員会委員名簿 資料２ 立川市第４次文化振興計画の概要 資料３ 立川市第４次文化振興計画 令和５年度の取組状況経過報告 資料４－１ 立川市第５次文化振興計画策定について 資料４－２ 立川市第５次文化振興計画策定スケジュール 資料５ 東京文化戦略 2030【概要版】
出席者（敬称略）	〔委員〕 委員長 今井良朗、副委員長 瀧川淳、 鈴木美智子、高木誠、成清北斗、堀江けんいち、松寄ゆかり 〔事務局〕 産業文化スポーツ部長 井上隆一、地域文化課長 轟誠悟、市史編さん室係長 新藤博、地域文化振興財団事務局長 足立香織、地域文化振興財団事務局次長 浅沼宏、地域文化課文化振興係長 瀧 研一、地域文化課文化振興係主任 郡麻里
公開及び非公開	公開
傍聴者数	１人
会議結果	・第４次文化振興計画令和５年度の取組状況について意見交換を行った。 ・次回委員会で行う内容について意見交換を行った。
担当	産業文化スポーツ部地域文化課文化振興係 電話 ０４２－５０６－００１２

1. 開会

- ・地域文化課長の司会により開会。事務局の職員の交代の紹介があった。

会議に先立ち事務局より、文化振興推進委員会の会議は「立川市審議会等会議公開規則」に基づき公開となる旨の説明があった。

〔会議の公開について〕

この会議は、基本的に個人情報等を扱うものではないので公開となる。会議の傍聴にあたっては、定員を5名とし、傍聴席を設け資料も用意する。議事録は、「会議概要」をホームページと庁舎3階の市政情報コーナーで公開する。その際、各委員の名前は、委員長と副委員長を除き、発言順に「A 委員、B 委員…」という表記とする。公開前に「会議概要」の内容をご確認いただく。

- ・事務局より、配布資料の確認があった。

(委員長) 今日は第4次の文化振興計画を振り返りつつ、第5次文化振興計画について、どのように進めていくのか、あるいはどういう内容が相応しいのかということをご各自議論していくことになるので、ぜひ発言していただきたい。

それでは、第4次文化振興計画の令和5年度中の取組について事務局の方から報告をお願いしたい。

(事務局) 今回配布の資料の内、資料3「立川市第4次文化振興計画 令和5年度取組状況経過報告」について。本来、この報告は翌年度の最初の会議でお伝えするものだが、来年度の会議が第5次の計画のために時間をもらいたいと思うので、今回報告が可能なものについては本日中に途中経過報告をしたい。

(事務局より資料3について説明があった)

(委員長) 令和5年度の結果について意見があればお願いします。特に今回は、前回からある意見だが、今のこの形式をそのまま踏襲するのか、変えていくのかというようなことも含めて、後で第5次について検討する際の一つの目安としても、今回ご意見をしてほしいと思う。

(A委員) ちょうど2月7日に終わったばかりだが、アール・ブリュットの巡回展について東京都のスタッフから他の会場でやった時より多くの来場者があった、やはりアール・ブリュットが立川に根付いていると言われた。他の、立川より開催期間が長かった都内の会場よりも多くの来場者があったということで、都の担当者がとても喜んでいて。今度10年目を迎えたが、やはり地元でやってきたということもあり地域の方たちがとても楽しみに来てくれた。中には、例年伊勢丹でやっているときの観客が、今回は例年より開場時間が短いので何日かに分けて来てくれて、とても身近

に感じてくれていると思った。

もうひとつ良かったと思っているのが、今回アーティストとして参加し、ポスターも書いてくれた18歳の高校生の子について。その子が通っていた学校の先生達が研修会の帰りに観に来てくれて、たまたまその生徒さんがいたので先生達と会うことが出来た。当時その生徒が学校でうまくいってなかったので、今その子が展覧会のポスターを描くようになっていいるということを先生たちもすごく喜んでくれていた。その様子を私達も見る事ができて、地元立川で開催するチャンスをもたらえたことが良かったと思っている。

また、他の作家の人達も土日に来て、自分の作品を来場者に紹介したり、説明をしたりといった具合で、すごく充実した空間が作れたのではないかと思う。

(委員長) そういった形で立川が注目されるということは、とてもいいことだと思う。特に、東京都の目標の中に入っているから。それはこれからも続いてほしいと思う。

ところで、副委員長は前回、第4次計画を振り返ってきちっと整理しなければ、第5次計画には進めないといっていたが。

(副委員長) 本当に活動や催しが非常に多く、多岐にわたるので、その次につなげていくためには、これを何かカテゴリーの分類をしながらイベントの成果を決めていくことがその次につながると思う。今回令和5年度の活動があったが、第4次に関して、例えばアール・ブリュットであればアール・ブリュットだけのものとして次にどうつなげていくか、一つずつ見えていくといいと思う。大変な作業だとは思いますが、そういったところが第5次につながっていくのではないかと、今おぼろげながら思う。

(委員長) 一つ一つ整理しておくことは必要だと思う。特に分類に関しても、おそらく第2次、第3次、第4次と、概ね踏襲されてきている。第4次に関しては1つ増えて、進化したという形にはなっているが。この形式がこれで良いのではないかという意見があればそれはそれで構わないと思うし、あるいはもう少し違った分類、もっと違った分類で計画を立てるということもありうるのではないかという意見があれば出してもらえればと思う。

(事務局) 今、副委員長からも話があった資料2の概要を見てももらえればと思うが、表面の「施策の体系」の右側にある、到達目標の「文化芸術はぐくむ 誰もが楽しめるまち」には取り組み方針が4点ある。以前の第3次の計画では3点だったところが分類を整理して4点に増えた。

(事務局より資料4-1～4-3、5について説明があった)

(事務局) 第5次の計画について、これを強化したい、あるいはこういった項目を取り入れたいなど、ご意見を頂ければと思う。

(委員長) これをもとに第5次計画について吟味していくことになると思うが、冒頭でもあった通り、まず第4次を整理したうえで第5次に進む、その点でもこの資料を基にしながら、なおかつ次に向けての意見ということで各委員から意見をもらいたいと思う。

先程分類の話があったが、ずっと練られてきたものなので整理はされていると思う。特に前回の会議でも出たが、例えば「つなげる、ひろげる」という、この新しい項目が引き続き非常に重要だということが今までの様々な意見の中にも出てくるテーマである。そういうことなのでこの辺りも重点的なテーマとして、意見をもらいたいと思う。いかがか。

(B委員) 分類の話ではないが、今説明があった中で、9番の市のホームページの事がわからなかったと思う。間もなく市民オペラをやると思うが、立川に十数年住んでいるが自分は市民オペラの存在を知らなかった。かなり市でも力を入れているということで、今年はチラシもよく見たが、この度委員会に加わり、さらにこういった報告も聞いて、随分と美術関係、古典芸能、子供向け、障害者向けなど、多種多様な活動を多くしているのが分かった。ただ、市として、この沢山の事業の中から力を入れているものがあると思うが、それが自分には見えてこない。立川に住んでいるがよく分からない。お金や場の提供など、やはり力を入れているものには、もう少し宣伝効果が欲しいと思うし、現状ではそれが足りないと思う。市民が見るのはやはり立川の広報だと思う。ムーサのような広報の別紙のような存在があるからということなのかもしれないが、一市民としてはこのイベントに力を入れているということが分かれば、このイベント知らない、ということにはならないのではないかと思います。

(委員長) 再三この意見は出る。

(事務局) 私も広報については課題があると感じている。自分もこの課にいるから気づく部分というのがかなりあると感じる。これだけ色々な事業が行われていることを、多くの市民に知ってもらうための重要な仕事だと思う。立川市の文化芸術がどういうものなのかを、まとめて伝える。今財団が文化芸術振興の中心的な役割を担っている中で、各種事業が行われ、それらの情報が財団で発行しているムーサや、市の広報の特集記事など多岐にわたる。情報を発信する方法として次の課題としても明確に方向を示していきたいと思っている。

他方、立川文化芸術のまちづくり協議会という、市だけではなくて民間の事業でアーティストも参加して運営している協議会がある。その中で、

立川ビルボードというサイトがある。そこでは記事を書いてみたいという市民の方を、ライターとして育成しながら、興味を持った題材をライターが取材をして、記事を書いて載せていくというものである。以前は記事の更新があまりできないこともあったが、今は市民の方が積極的に参加し、記事を書いてくれている。特に市民オペラについてはライターが記事を連載していて、このように市だけではできないことを市民の方の力を借りながらやっている。広報媒体が分散しているのは課題かもしれない。立川ビルボードのページにたどりつけないという課題については、今後立川市のホームページをリニューアルする予定になっているので、それにより見やすい方向に持っていきたいと思っている。もう少し時間が欲しい。

(委員長) 動いてはいるのか。

(事務局) 動きが遅くて申し訳ない。いずれ見える形でやっていきたいと思う。

行政だけでなく民間の業者でも非常に多くのところが動いていて、アール・ブリュット立川のような市民団体として活動されている方、文化協会のように地域で多岐にわたって活動している方などあるので、それをどう見せるか、また、市民にも参加してもらえそうな仕組みができるのかというところが非常に重要だと思う。

(委員長) ホームページの問題は再三言っている。どこにいったら入れるのか、ずーっと探してやっとたどり着くというような感じになっている。今、具体的に動いているようならば、待つしかない。やはり具体化しないと、一つ一つが解決しない。何とかしてほしいという意見もずっとある。もちろんホームページの最初のページに直通のボタンが欲しいという訳ではなく、ただ、情報が一覧化したところに行きたいということが大前提である。行ってみたらそこに立川ビルボードがあったというようなものが欲しい。立川ビルボードのページに入るとたくさん情報の選択肢が広がる。すごくよくできたページになっている。しかし見る側にはわからない。そのページがあることを知っていて探している人間がわからないのだから、一般の市民にはまず見つからない。わからないといっている人の意見を聞くこと、これが大事。この辺りが今回のつなげるということで重要だと思う。

(C委員) 市民ライターのモチベーションも、皆に記事を見てもらっているということが大切。そういう中で、改めて市民ライターを募集したいということで、2月にSNS等の広告も利用して募集をしたところ、市内だけではなく近隣市や区部からも応募があった。そんな遠方から来てくれるのかと思っていたけれど、それだけ立川のアート・文化を見たいという風に

外の人からは見られている。立川には何かあるだろうという期待感があるからこその反応だと思う。「HP見つからない問題」も、もっと SNS を運用していくとか、広告を効果的に掛けるとかしても良いのではないかなと思う。今回の市民ライター募集の広告を SNS にかけて際には 30~60 代の方の問い合わせがあったので、市民オペラも、そういう SNS も使っていくともっと紙媒体だけだと届かない層への発信が増えていくかなと思う。

(委員長) 次の重要な議題にしたい。

(C 委員) 恥ずかしながら、つい最近まで立川名画座通り映画祭というのがあったのを知らず、これは毎回応募が 200 本位あるすごいものだ。自分も映画畑にいたので思うが、映画でそれだけ集まるというのはすごいことで、スマートフォン部門などが作られていて、大学生や若者の応募もある。それは、この文化振興計画にある「若者たち……」を既に体現されているようなイベントだと思うし、こういうイベントがまだまだ立川にあるのではないかなと思う。この映画祭は立川ビルボードで取り上げたが、こういう情報がもっとあると思う。

(委員長) 立川だけではなくて多摩全体という視点は以前の話でも出ていたが、その辺りも、第 5 次計画では明確に打ち出していかなければならないと思う。文学賞にしても、立川文学賞も意外と知られていない。なので、そういうものが沢山あるということを今後発信していきたいと思う。

(事務局) 今話を聞いていて、発信というところが弱いのではないかなと思う。令和 4 年度に庁内でシティプロモーション推進担当課という部門を作って、立川という市を発信しようじゃないかとやっている。総合政策部の中で広報課と共に発信しようということで課を作った。資料 5 の 3 ページ 10 番の「事業者……」にある、企業もアリーナや商業施設でスポーツをはじめとした様々なイベントを企画し発信に一生懸命取り組んでいる。市もそこに乗るのは全体としてはいいことだとして、一緒に取り組んでやっている。また、毎週土曜日に、TBS ラジオで番組がある。立飛が提供をして作っている全国放送の番組だが、多摩出身の MC やゲストが担当しており、多摩の情報の発信をやっている。イベンターだけでなく、企業やアーティスト、行政も絡んで、色々な力で盛り上げられるのではないかなという話が出た。色々な角度から立川のことを発信するのが重要ではないかなと思う。今日も委員の方々から意見を聞き、発信ということが肝になると思った。

資料 2 の施策の体系図の中でも、すでに練り上げられているものに、新たに「つなげる、ひろげる」というエッセンスが加わったことで、今度は熟成をして、発信を含めて熟成させれば、いい形になるのではないかなと思う。

う。30 年前に比べると立川の知名度も上がったし、それは本当に皆様のおかげだと思う。

(A 委員) 自分もその立飛のラジオ番組に出た。こちらからラジオに出たいと伝えた感じだが、丁度立飛から依頼を受けていた壁画や東地下道のことを宣伝したいと伝えたところ、出演のチャンスをもらった。パーソナリティ達も立川のことをすごくよく考えてくれていて、とてもいい体験をしたと思う。

あっという間だったが、パーソナリティのおかげで、できる限りの立川の宣伝をしてきた。

民間企業などと一緒にやっていくことがすごく大事だと思った。自分達の団体は、立川ビルボードやムーサ、立川の広報などの色々な媒体に出ているが、細かいところが市民に伝わっているのかと思っている。先ほど話に出た映画祭にも行ったが、高校生のような若い人達が受賞しており、今はスマートフォンで映像が作れるのだなと感動した。自分はアナログの人間だが、若い人達が楽しそうに映像を作っている姿を見て時代の変化を感じた。立川はこれだけ多くの社会資源を持っている。これだけたくさん活動がある市は他にないと思う。実はアール・ブリュットの実行委員も半分以上は他市の方で、わざわざ立川市のために時間を割いて来てくれている。遠方から立川のためにボランティアで動いてくれており、すごくありがたいと思う。委員長も言っていたが、これだけの社会資源、団体をどういう風にプロデュースして一体化し、発信していくのかということが非常に大事だと思う。市民にわかりやすく発信していくことがすごく大事なことだと思う。最終的にどういうところに着地したいかということもすごく大事ではないか。分類もするけれど、自分達委員や行政、民間団体も含めてどういうところ、どういうまちにしたいのか、着地点をはっきりさせておく方が取組の仕方も違ってくるのではないか。

(委員長) 今、意見があった着地。どこに着地させるのか。これまではどちらかというと構想的なことが多く、具体化と言いつつ中々できなかったが、見える着地をしていきたいと思う。

(B 委員) 行政とは、もっと幅広いものだと思うので、行政のひとつの課だけでやるには難しい課題だと思う。ただ、バラバラになっているというのは大変なので、市に届いた情報を精査して発信する方法があればいいと思う。個人的なことだが、自分は市民会館に来るのに少し時間がかかる。市民会館の辺りの情報は、中央図書館や駅などで色々なチラシを見ることができると分かっているが、自宅の方にはあまりチラシが入ってこないように思う。昨年度国立音楽大学に第九を見にいった。毎年行っているが昨年度

はいつもより混んでいたもので、不思議に思った。駅にチラシがあったというのもあるだろうし、遠方からの来場者がいたり、大学の卒業生が来ていたりするのだろうが、少し驚いた。コロナ禍が明けたからなのかもしれないが、人出がすごかった。他にも、国立音楽大学でやっていた楽器の展示の企画などは、抽選に外れてしまい、多分人気があるのだと思う。学校関係のイベントというのは強いかもしれない。

(委員長) 大学はそれぞれ独自に広報があるからかもしれない。

(副委員長) 第九に関して言えば、コロナ禍で開催中止が続いていたこともあり、客も生の音に飢えているのではないかと思う。この人出が今後どういう風が続いていくかわからないところではある。ただ、毎年売り切れる公演というのは決まっていて、ミュージカルは2日間分のチケットが売り切れるくらい人気がある。ただ大学も別に宣伝が上手いわけでもない。今回も博士課程の生徒の発表を広報紙に載せてもらっているが、紙面を見ただけでは何をやるのか伝わりづらく、これでは行きたいとは誰も思わないのではないかと思った。だから盛況だったのは、観客が生の音にすごく飢えているからではないかと思う。

(委員長) 音楽の人たちも、若手で注目されるような、いい人がたくさんいる。それはとても大きいように思う。今意見があったように、どうやって連携していくのかというのも、これは全部リンクしている。この連携というのも第5次では重要になると思う。それと先ほど出た、行政だけでは無理というのも当然だと思う。網走市の例だが、網走市では当初教育委員会がイベントを行っていた。つまり市で全部やっていた。ところが市民ホールが出来上がり、今度からその会場で文化芸術のイベントをやるとなったときに組織割をした。で、教育委員会が手放すことになった。それで市民団体を作り、そこに数人、市の職員を派遣してやることにした。以降はその団体で計画を立てたり、人を手配したりというようなことをやるようになった。2000年ごろからコロナ禍を挟んで約20数年この体制だが、出演する側としても今の体制は動きやすい。なので、そういう考え方がこれから必要だろうと思う。全部が市でやるのではなく、目的に合わせた小さな団体を作ってしまう。網走の場合は青年団の実行委員会だが、実際に動いているのは美術館の人。だからどこかでは行政が動くことが必要になると思う。ただ、全部を行政がやる必要はないとも思う。連携してやるというようなことも良いのではないか。

(D委員) 文化の発信というのは、文化の違いというのも原因にあると思う。欧米などがそうだが、公共施設や地下鉄では芸術関係の宣伝を優先している。自分の生徒も海外で活躍しているが、地下鉄にも写真が載っている。バス

停やエスカレーターでも、歩いているとミュージカルや演劇の広告が目に入ってくる、ビジュアル化されている。一般の人はパソコンで情報に辿り着けないと思う。しかし欧米は、公共施設のような見える場所では芸術に関して広告費が安い。だから、「この場所は芸術関係」とか決まっていて、歩いていてもミュージカルなどのお知らせが見える、目に入る。東京都も地下鉄やバス停に宣伝してほしい。街自体が芸術に弱いから個人が発信できない。多摩でいえばモノレールなどがスペースを提供するなどして、そういう後押しをしてほしいと思う。例えば、ららぽーとなどが広告スペースを開放して、オペラやバレエをやっていることを市民に周知できれば、大分変わってくると思う。アメリカもそうやってヨーロッパなどから影響を受けて芸術に開放して来た。日本もいいところは真似して欲しい。立川市でも企業などに協力してもらって市民の見える場所で、例えば池袋では駅前に芸術劇場もあり駅に広告を出しているし、立川もそういう習慣を柱にしてほしい。そうすると市民の意識や街並自体も変わってくると思う。いくらホームページを見て欲しいと言っても、見てもらえるときと見てもらえない時がある。企業や学校と協力して、実現してほしいと思う。一つのアイディアとして考えて欲しい。

(委員長) 実現するためにはかなり難しいと思うが、検討はしていく必要はあると思う。そういった支援の形はヨーロッパでは普通のことになっている。

(事務局) 地下鉄も含め、公共的なところを芸術に開放するのは、行政としてはその意見は賛成です。乗りたい気持ちはある。しかし一方で文化芸術を好まない市民もいて、そういう市民からクレームがどうしても入る。どうして公共の場所をそういうことに使うのか、と。そうすると公平の観点から、中々そういうわけにもいなくなってくる。都も含めてそれが現状である。やはり繰り返し発信をしていかなければならない。やはり発信に尽きると思う。B委員の方からも市民オペラについては評価をもらったが、市民オペラについては、財団も含め強く発信をしている。市民もそこは評価してくれているので今更強く言われることはない。

(D委員) 外国にも勿論、貧しい人たちもいるのに芸術なんて、という意見を言う人はいる。しかしそれとはまた違うと思う。日本人はどうして、変な平等意識というか、次元が違う話を一緒にしてしまうのか。外国はちゃんと伝統・芸術文化というのは認めている。

(事務局) ヨーロッパは、例えばウィーンは文化芸術のイメージがすでにある。しかし立川では「なぜ立川で文化芸術なのか」といわれてしまう。その塩梅が難しい。B委員の話でも出たが、例えば墨田区はスカイツリーや国技館、隅田川などを中心にまちづくりがなされていて、黙っていても街全体

が、住民を含めて、形作られているということもある。それは中々難しいこともあるが。ただ立川の場合、立川だけではなく、多摩全体として文化芸術をどうしていくのか、という視点を一旦は入れておく方が説得材料にはなるだろうと、個人的には思う。

(委員長) これは相当難しい問題だと思う。人間とは生きていくうえで文化芸術は絶対必要だと思う。しかし誰もがそれを理解しているわけではない。この委員会でも散々論じられてきたが、そのために文化芸術をどのようにして身近に体験してもらえるかというような努力が一番必要であり大切。

(D委員) 違う角度から行政と話をさせてもらうことがあるが、芸術というのは、ポリショイとかパリオペラ座もそうだが、例えばパリのオペラ座だけで1万人の雇用が生まれている。芸術が産業として成り立っている。もちろん国からの補助もある。日本では中小企業などにすごい補助金が出ている。それは、回収できるかどうか分からないけれど、産業としてやらなければいけないから、という理由がある。それに比べると芸術活動に対してはものすごく補助金が少ない。日本では芸術を産業として認めていない。ちゃんとやれば産業として成り立つのに。ポリショイなども雇用を生むなどして産業として成り立っている。

そうすると、例えばウクライナが戦争の経費のために芸術にかけられる予算がなくなり、可哀そうだから日本から自分達が何とか支援をしたいと思っても、よく考えたら日本にいる自分達が芸術だけでは食べていけないという現実がある。自分達が食べていけないのに、その中で一体何がしてあげられるかと自問自答している。アメリカではミュージカルなどの芸術が産業として成り立っている。成り立たせる力がある。今の我々には無理だけれど次の世代には産業として成り立たせて、芸術活動で食べられるようになってほしい。

(B委員) 墨田区も錦糸町の北口エリアの再開発の時に、新日本フィルの拠点としてトリフォニーホールというのを造ったが全然認知がされなかった。これから落としに小澤征爾氏を呼んだりが、それでさえ認知はされなかった。認知をしてもらうというのは、本当に大変だと思う。

因みに、多摩モノレールの玉川上水駅がある場所は東大和市になるのか。東大和市のホールのイベントのチラシはいっぱいあるが、立川市のイベントのチラシはほとんど見かけない。小学生の画などは飾ってあるが。それが立川市民として寂しいことだと思う。同じくモノレールの立川南駅だったと思うが、市民オペラの宣伝がいっぱいあり、写真などを見たが、同じようなことは玉川上水駅ではできないのか。

(事務局) 玉川上水駅の場所は東大和市になり、行政区域が違うので難しいと思う。

以前に国民体育大会があった際には、多摩地域だけでなく東京都の 30 市町村で一体となって宣伝をしたこともあった。何かのきっかけがないと動くのは難しい。仮に立川市がモノレールに依頼をしたとしても、東大和市にある駅で宣伝することは難色を示されるなど、色々難しい。

(委員長) 壁はやはりいくつかあると思う。しかし色々な話を聞きながら、どうやったら効果が出るのかなど、色々な人たちが知恵を出し合って決めることが出来たら、それはそれで一つの成果だと思う。せっかくの提案なのでこういう時間、場所が作れたらというのを投げかけてみる、というのは十分ありうることだと思う。

(E 委員) 自分からも。策定する計画というのは、勿論、市の計画なので主語が市であり、「(市が) つなげる、ひろげる」となっていると思うが、もっと正確に言うと「つながる、ひろがる」でいいのではないかと、実質的に考えて、思っている。ある程度市民目線で始めると皆の思いが伝わって、もっと活発に意見が出たりするようになるのではないかなと思う。広報なども、コントロールできないところまで行ってしまうとそれはそれで問題だが、今は SNS を使うなどの手段があるので、一定程度は市民の人達の自発性に委ねるという余白の部分があることも、自然に広がっていくのには重要かなと思う。SNS の利用や空間の利用もしかり、自由というか自発性があるとより起きやすい。逆に言うと行政がしっかりと手綱をひいてしまうと四角四面になり、市民が参加するには窮屈で参加の障壁になってしまうのではないかなと思う。本当にここは重要なキーワードになってくると思うし、来年度に向けてフレキシブルな考え方が入ってくると良いと思う。

(委員長) 今の「つながる、ひろがる」というのは非常にいいと思う。今までの「つなげる」というような希望ではなく「つながる」というのは「つながっていきましょう」という具体的な言葉である。そういう風に少し変えるだけでもまた深化していく。

(C 委員) 第 5 次の中に是非入れてほしいのは文化芸術と産業のつながり、ということで言うと、文化芸術を立川の観光の一つの大きな素材として捉えてもらおうと色々な問題が解決すると思う。駅貼りのポスターなんかもその 1 つだが、JR やモノレールなどが、その観点で P R をするとお客さんがいっぱい動いてくれて、国営昭和記念公園でもやっているが、文化芸術を観光資源として捉えて立川市外からも来てもらえるように計画をたててもらえれば、そこから生まれること、出てくることもあると思う。

(委員長) 自分が学生の頃は演劇や音楽には広告が結構入ってきていた、しかも固定で。だから、そういうことを積極的に提案することはありうる話だ。例えばポスターの下から 10 センチを広告として自由に使っていていい、など。そ

こから色々なイベントのポスターを作ってそこに広告欄を作ってやっていくというような発想は、むしろ今だからこそというような気がする。今はあまりそういう形ではなく、本当に興行のスポンサー的な発想しかないけれど、昔はそうではなかった。わずかだけど支援していく、つながっていくというような環境を作るといえるか、そういうことを考えてみても面白いのかなと思う。

(副委員長) コンサートなどのプログラムの中にも協賛が入っている。会場に来た人、プログラムを買った人だけが見ることができる。プログラムの下などに広告が入っていると、自然と目に入るものだ。一般市民の目に触れるわけだが、そういう取組も企業価値として、そこに広告を出すということはメリットが大きい。

(委員長) たしかに立川であれば立飛やたましんなどというのは、ある程度は決まった声がある。広告欄として最初から 10 センチ提供する、その代わりにその分の支援金を出すことになる。そういうのがあってもいいような気がする。

(事務局) C 委員が話したように、観光として立川観光コンベンション協会という組織としてしっかり立ち上がっているものがあるので、そことの提携も増やしていかなければならないと思う。先ごろ、プラチナマップというものを立川観光コンベンション協会が制作した。飲食店やファール立川アート、国営昭和記念公園などを紹介するサイトで、実際に立川に来た人に、文化芸術だけではなくて立川の色々なところを知ってもらうためのサイトである。今あるものを活用しながら広報する手段を増やすということもできると思う。こういった観光面での連携も図っていきたい。

(委員長) 残りの時間が少し無くなってきた。作家目線、アーティスト目線ということで意見があったと思うので、E 委員には少しそういった目線での意見がほしい。

(E 委員) 先ほどの余白の部分ではないが、結局、表現する場というのはそれぞれだとしても、自発性に基づいて表現活動を行っているということは共通だと思う。そういった場を提供してもらえることが活動自体を継続しやすくすると思うし、よく会議で話に出てくるアートに携わる人たちにとっても色々な関わり方があると思う。先ほどの墨田区の話に出てきた小澤征爾氏のような著名人ならば「どうぞ来てください」と言われるようになると思うし、あるいは市民の方が、いわゆる趣味として携わっているような人もいる。しかし、そのどちらにも分類できないような作家だったり表現者だったり、そういう人が意外に一番埋もれていると思う。サポート対象にもならないし、どういう風にうまく関わりを作っていけるのかなと思う。

(委員長) その辺りも資料の中に意見がいくつかあったと思う。つないでいける人、ボランティアやサポーターといった人達を育て、なおかつその「場」を作り、でも自然となるものではないから、どうやったらうまくいくのか。これも今までずっと議論されてきたが、やはり高校生・大学生含めて、ああいう人達をどういう風に自発的に来てくれるような場所を作ることができるか。それを真剣に具体化していくということが大事ではないか。

(E 委員) 学生は、学生の時分に特別な思い出だったり経験だったりをすることで、立川を特別なものとしていくのかな、と思う。自分自身もひょんなことから関わることになり、そのような経験を持った身として、その後が続くこととして立川だからこそのサポート団体とか活動をしやすいような環境があれば、より特別な思い入れをもった学生がアーティストになって、より立川を、それこそ自発的に「つながる、ひろがる」点で広げていってくれるのではないかと思う。結局自治体がというよりも、大学や芸術教育にも同じような課題があるのではないかと思うのだが、学校を出た後のつながりというのが意識しないと本当に途切れてしまい、後は自分達でやってね、というような状況で放り出されるという様な経験が自分もあったものだから。最初の 10 年くらいで挫折してしまうような卒業生や自分の知り合いも割と多かった。私は 40 歳になる手前だが、今の段階で卒業してから 10 年ほど経ち、すでに芸術に携わっていない同級生や知人の方が多い位である。それが、人材的にもすごくもったいないと思っている。もちろん芸術に関心がない市民もいる、それは勿論、その通りだと思うが、一方で芸術の持っている力を……という、それも間違いないことだと思うので、それが対立するのではなくて市を構成する一つの要素として継続して発展していけばすごくいいと思う。

(委員長) アーティスト支援もずっと一貫したテーマの一つなので、こういった「場」をどのようにして作っていけばいいのか具体的な方法を今後の委員会の中で検討していかないといけない。その他で何かあるか。

(事務局) 「誰もが文化に親しむ」というところで、障害のある方にむけた、1 月に行われたミュージックワークショップに手話付きのワークショップを一つ付け加えた。立川に立川学園というろう学校があり、その学校へ「今度こういう事業があります」ということで宣伝に行ってきた。ろうの子どもたちということだが、一番好きな授業が音楽だそうである。身体全体で音楽を感じて、楽しんでいる。ただ、その学園に色々な団体の方がアウトリーチで来てくれるので、わざわざ外に行って、芸術を鑑賞するということは中々難しい、ということだった。そのような中でワークショップに来ていた子どもたちが 16 組位おり、その内 2 組がその学園の子どもだった。子

ども達の中であろうの子どもたちも一緒になって同じワークショップを受けていた。簡単な手話が付いていてろうの方も内容が分かる、簡単な、音楽を聴くワークショップで、3歳から6歳くらいの子どもたちが参加するワークショップだった。やはり子どもの内から、そういう障害のある子どもたちに触れて一緒にワークショップをすることで、障害のある方への理解もすごく深まったという風に思った。このコロナ禍で、障害のある方が対象の事業がどうしても中々出来なかった事情があるが、やはりアウトリーチに行き、障害がある方達に文化を伝えるというだけではなくて、障害のある方々に来てもらって、健常者の方と同じ場でやれる場を作っていくということも「つなげる」という意味ではすごく重要なことだという風に肌で感じた。今後ともこの計画の中にそういう部分を残していきたいという風に思っている。

(委員長) 他にあるか。なければ今後の予定をお願いしたい。

(事務局) 皆様にいただいた意見をまとめながら進めたいと思う。次回会議は4月を予定している。その際には本日配布した資料を見ながら検討してもらえたらと思う。スケジュールについては改めて調整する。

(副委員長) 最初は皆遠慮がちだったが、段々と皆の思いが聞けて良かったと思う。最初の方に委員長から話を振られて、分類というような話をした。かなり色々なイベントをやっている。それを最終的に「文化芸術ではぐくむ 誰もが楽しめるまち」というものにどういう風になっていくのかということに、分けていくことが必要だと思っている。そういったことを見ながら新しいものを、より良いものが策定できればと思う。前回も言ったが、現在の計画は「誰もが楽しめるまち」ということで「まち」が主語になっている。第5次は市民、人が主語になってもよいのではないかと個人的には思っている。個人的には「つなげる、ひろがる」が最初のメインテーマ、目標によいのではないかと思っている。「文化芸術で『つながる、ひろがる』立川市」だとか。自分はそこに一つ、「交わる」というのも入れたいと思っている。先ほどのアウトリーチの話やアール・ブリュットの話もそうだが、何となく、今は孤立した団体が単体であるけれど、今は多様性というものもあるので、色々な人がそこに交わっていける街というのが理想的だという風に思う。やはり新たに作るとか、興すとか。東京都の戦略の3にも創造性を生み出す、とあるが、やはり作品が期間限定でその後消えてしまうのはすごくもったいないので、インターネット上でアーカイブにしていくなど歴史を蓄積していくことは、夢があって楽しそうだ、と思った。そういったことで締めとしたい。

(委員長) それではどうもありがとうございました。